

ROTARY CLUB OF

KANAZAWA-NORTH



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30~13:30

例会場：卯辰山・ホワイトハウス

事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所

TEL <0762> 22-2525

会長：若野三郎 幹事：吉山宥海

情報委員長：清水 忠

1978・12月7日 第129号

“金沢と用水”

金大工学部教授 小堀 為雄 先生



城下町金沢成立の濫觴を辿る時、用水の建設が、一向一揆の真宗文化の根絶と共に、前田藩のまちづくりの最も大きなテーマであったことに気がつく。辰巳用水や鞍月用水、大野庄用水をはじめ無数の用水で網の目のように被われた金沢は、文字通り用水文化のまちといってよいであろう。

それは、長い間生活用水として、或る時は飲み水に、或る時は洗濯に、或る時は防暑に、排雪に、防災に、市民に限りない思恵を与えて来た。

しかし、そういった機能もさることながら、私たちは今、その用水の美しさに、現代的意味を見出さざるを得ない。

たとえば里見町あたりを歩く時、私たちはふと、あかね橋などといった風雅な用水の橋のたもとで、清冽な流れに、柿やざくろの枝が、白壁の土蔵や土堀越しに被うのに出会って、思わずホッとした心の安らぎを覚えるであろう。

その安らぎと思索の雰囲気、西田幾多郎をうみ、鈴木大拙をうみ、泉鏡花をうみ、そして比類なく高雅で美しい金沢の伝統文化を創り出して来たのではないだろうか。

私たちは子孫のために、この美しい用水の流れを絶やしてはいけないと、私は今秘かに考えている。

—金沢北RC例会講話から— (文責 清水 忠)

ふるさとシリーズ “橋”

⑧ 梅の橋 (浅野川)

今年春、古都金沢に相応しく、20数年振りにしっかりと落ちついて生れ変わった。

一見、京の五条橋を想わせるその姿は私達に安らぎを与えている。

街の景観が都市開発上大きな問題となる昨今、道路や建物だけでなく橋一つとっても都市美を形成する上でいかに重要な要素であるかを示したと言えよう。

今年度、金沢にふさわしい金沢都市美文化賞を受けた。その意義は大きい。

—例会講話者、小堀為雄氏は此の橋の設計に携わる—



## 私 の 名 刺

下 村 義 明



私は、昭和7年1月21日に、染色店を営む父の二男として生まれました。

父は15歳の時から上村染色店に奉行し、25歳になって独立し、弟子を4・5人使う小さな染色店をはじめました。母が早くに亡くなりましたので、父は苦労しながら、私達五人兄弟を大きくし、家業に勤しんできました。65年間、仕事一筋に生きてきた父の職人魂は現在も健在です。

御陰様で、51年には、通商産業大臣より“伝統的工芸品産業功労者”として表彰されました。

二男である私が家業を継ぐことになったのは、兄が学問好きで病气勝ちであったためです。父は兄を教師にしようという夢を持って

おりました。私は、スポーツ特に登山が好きでしたから、体はたいへん丈夫でした。

市立工業高校を卒業した私は、すぐに家業に入りましたが、幼い頃から機械弄りが好きで、機械関係の仕事に着きたいという夢は消えてはいませんでした。

しかし、一年・二年と月日が過ぎるうちに、仕事にもおもしろさが出てきて、これが自分の一生の仕事だと決意したのは、21歳の時であり、それからは真剣に将来のことを考えるようにもなりました。

伝統工芸が見直されるようになり、父の代から私へと経営も任されるようになりました。昭和51年には、有限会社下村染工として小さいながら会社を持ち、私が経営者になるまでに至りました。

現在家族は、父と妻、短期大学一年の長女、高校二年の二女、高校一年の長男の6人です。皆元気で私なりに安定した生活を送っております。

私は自分の体の許す限り、この日本の伝統的な仕事を続け、加賀友禅発展のために、一層努力を重ねて行くつもりです。

また、友禅を愛する若者に美しい伝統を伝えることが、これからの私の新しい役目だと強く思っております。まだまだ未熟な私ではありますが、今後共御指導賜わりますようお願い致します。

## 趣味の会ご案内

### ■英会話クラブ

世話人 飯野健志  
日時 毎週木曜日 PM1:30~2:30 (例会終了後)  
場所 ホワイトハウス  
会費 1ヵ月 3,000円  
講師 ルース・スチープンス先生(金沢経済大学講師)

### ■茶道部会

世話人 米沢修一  
日時 随時全会員にご通知致します。  
場所 持明院(神宮寺町 蓮寺)  
会費 随時かわります。  
講師 吉山宥海会員

### ■民謡の会

世話人 益谷健夫  
日時 第一・第三土曜日 PM6:30  
場所 北陸電力山ノ上寮  
会費 2,000円  
講師 前田 正氏(日本民謡協会評議員)

### ■油絵の会

世話人 桜井健太郎  
日時 毎週金曜日 PM6:30より2時間程度  
場所 館画材店2階(大樋町4の6)  
会費 画材一式 約15,000円(他、講師の謝礼)  
月会費 3,500円  
講師 益子佳苗氏 金沢美大卒・光風会展

## 「死」あれこれ (2)

越野 民男

然し、この薬は、そんなに急速に飲んですぐ効果のもではありません。目まいとか頭痛等には案外早く効き、ああ治ったと錯覚される方もあります。然し、これも決して治ったのではなく、一時的によくなったのであって、一度、動脈硬化症と診断がいたら、これは一生治るものではありません。別にコマーシャルではありませんが、私の長い間の経験によれば、薬は相当に効果があります。真面目に薬を飲んでおられる方は、中風になる率は少く、同じ程度の半身不随の方でもその後、ずっと服薬しておられる人と、薬をやめられた人と比べると、悪化率、或は死亡率は、服薬中止の人に断然、多いという事です。

首吊り自殺にも、四回程出会いました。あの姿だけは、本当にゾーッとする様な、いやなものです。開業間もない頃でした。近所のお婆ちゃんが慌てふためきながら、かけ込み「爺ちゃんが大変や、すぐ来てほしい」只ならぬ様子です。数回、診察した事のある爺ちゃんです。走りながら、あの人は58歳、死ぬ様な病気はなかった筈だった、自問自答しました。「爺ちゃんは何処や」長男が、上を指差し「二階、二階」二階へ上がっても誰もおりません。「何処？」ふり返ると、押し入れを指しています。戸を開けて私もビックリ、腰をぬかしました。天井から帯をさげ、ブラリンコと下っているのです。目はギョロリとこちらをにらんでおります。首吊りなら、首吊りと一言聞いていたら、こんなにビックリすることもなかったろうに。どうしてもおろす勇気がありません。脈をみてすぐ警察へ連絡させました。二人の若いおまわりさんに「お前ら、おろしてくれよ」彼等も、余りよい顔をしていませんでしたが、仕方がないとあきらめ顔で、作業にかかりました。

医者には、盆も正月もないといわれますが元旦早々、おもちをのどにつまらせた方もいました。

さて、話はさかのぼります。1945年即ち、昭和20年8月15日、天皇陛下の所謂玉音放送が電波にのって、海を越へ、満州へも送られて来ました。当時私は軍医として、奉天の陸軍航空隊に勤務致して居りました。

「日本は敗けるだろう」と、年始めの頃部隊長から暗に聞かされておりました。8月9日ソ連軍は遂に満州の国境を突破し、怒濤の勢いで進軍して来ました。死は目前に迫って居たのです。陛下のお言葉も当然「全員特攻の精神で、戦ってくれ」との放送だろうと、思っていました。豈図らんや、降伏です。

然し、戦争は——戦争は終わったのだ。一瞬「俺は死ななくてもよい、助かった、生きてゆけるのだ」このひらめきが、頭の中をよぎりました。こう思ったのは、私一人ではないと思います。

日本敗戦——それでは戦争中に死んだあらゆる人達は犬死に終わったのだろうか。とにかく、大正生れは五銭の赤紙に等しい命であり、鉄砲の的になるために、この世に出たのかもしれない。色々な学校のクラス会に出席しても少なくとも5分の1、10人に2人は戦死者です。

ラバウルに始まり、硫黄島、アッツ島の玉砕、広島・長崎の原爆死、沖縄のひめゆり部隊、そして住民を交えた数万の戦死者、神風特攻隊等々……彼らの死は何のためだったのでしょうか。彼等の死、私の生を考え、私は今年沖縄と広島を訪れてみました。特に広島江田島で海軍特攻隊の遺書を読んだ時は、つい目頭が熱くなるのをおぼえました。原爆の様な突然の死、予期せざる死、勿論、悲惨です。然し、一方特攻隊の人々は自ら死を志願し、片道切符のガソリンを積んで死地に飛びこんで行ったのです。その遺書を2・3通走りかきで書いてきました。

◇群馬県出身の岩佐中佐 真珠湾特攻隊

桜花 散るべき時に散りてこそ 大和の花と 賞<sup>かな</sup>でらるなん

◇神風特攻隊 二等兵 植生

山桜散り行く時に散らざれば 散り行く時は既に去り行く

◇某特攻隊

人は皆、何時かは死するもの 死ぬべき時に死してこそ 値、生ずるらん

◇真珠湾特攻隊 某海軍大尉

身はたとえ異郷の海に果てるとも 護らでやまじ大和大国

◇某特攻隊

寄せ書きを書かせる人ぞ憎らしや 己がつたなき筆眺めつつ

◇神風特攻隊 某海軍中尉（一部のみ）

お父さん、お母さん、生前の不幸をお許し下さい。此のお詫びは、立派に死んで償わせて戴きます。泣いて下さるな。立派に散ったとほめて下さい。

こうした彼等の必死の攻撃も効なく、昭和20年8月15日正午、日本は遂に無条件降伏したのです。然し、戦後33年、平和な今日の日本の姿をみるにつけ、彼らの死は決して犬死ではなかった。まさにこの平和の礎であり、自由日本建設の立て役者だったと思います。

昭和20年8月19日迄、奉天では無気味な平音が続きました。そして、19日ソ連軍が進入して来ましたが、これが契機となり奉天は、完全なパニック状態に陥りました。

ワァワァ騒ぐ満人（失礼ですが、当時言っていたのでそのまま呼びます）の群衆が次々と日本人の家を襲い、そして逃げる日本人に略奪、放火、更には殺人まで始めたのです。炎天下の8月19日の昼過ぎから奉天の方々に火の手が上がりました。この状態は明る8月20日迄続きましたが、ソ連軍が治安に乗り出し、8月21日、漸く、小康状態になりました。8月10日頃より、奉天へ北満からの避難民がなだれこみました。劇場も小中学校もこの避難民でふくれあがりました。ところが、彼等の大黒柱である御主人は、殆んど徴用で俄かに軍隊に引っ張られた為、その大部分は、女と子供と老人達でした。ソ連進入まで、即ち8月19日迄は、ささやかながら、奉天在住日本人により物資の補給があったが、その後は、完全に放置されました。

栄養失調、衰弱、加ふるに、赤痢、チフスの伝染病が入り込み、毎日トラックに山積みされた死体が何台も運ばれて行くという話が私の耳に入りました。その頃、私は町はずれの部隊飛行場の裏にある軍人軍属宿舎に約300人余と一緒に立てこもっておりました。その宿舎の柵の周りは周辺の満人で取り囲まれておりました。軍属の半数は12期生で、2年前に全国から集められた小学校の卒業生でまだ、15・6歳の子供達でした。最初のうちは、危険で外へも出ることができませんでしたが一週間も過ぎた頃には柵外の満人の姿も、殆んどなくなったので、ある日、2・3人の友達と初めて町にでてみました。道端で4・5人の死体をみましたが、部隊前の広場で生前よく飲み歩いた原田伍長の死体を見つけました。真黒に蠅がたかり、うじ虫が顔をはいまわっているのです。酒を飲むとかってパレンバンで落下傘部隊で活躍した話を得意気に話していた原田伍長です。戦争が終わってから、生命を捨てるとはまったくの犬死になってしまったのです。死体を附近の低地に運び、土をかけて葬りました。

我々の宿舎から、10数名の赤痢患者が発生しました。直ちに隔離し、その頃よく効くといわれた赤痢の薬、トリアノンを使いました。重症の2人を残して何とか危機を乗り切りました。12期生、即ち15・6歳の子供の2人だけが重症でよくなりませんでした。遂にトリアノンもなくなりました。

部隊の医務室にはトリアノンもリンゲルもある事を知っていましたが、ソ連に占領されており、薬の入手方法はまったくありません。当時は、陸軍病院への転送も無理です。私は一日に何回も彼等を診察に行きました。20畳程の大部屋に2人は昏々と眠っており、それに無数の蠅がむらがり身体

をなめまわしているのです。始めは、色々と手をつくしましたが、病気は進行するばかりです。薬があれば治すことができたのに——。医者として誠に残念でたまりません。3・4日たつうちに私は2人の早く死ぬ事を祈っていたのです。医は仁術であり、命は尊厳である筈です。然し相手は、伝染病、再び感染するかもしれません。一週間程して2人は相次いでこの世を去って行きました。9月中旬、私はソ連軍の捕虜になりました。初秋の小雨降る中をしょぼしょぼぬれながら宿舎を後にしました。

それから4年数ヵ月、昭和24年11月3日、舞鶴に帰国致しましたが、その日も小雨が降っておりました。

## 曹洞宗総持寺へ参禅して

去る11月18日、門前の総持寺において参禅会を親睦委員会主催の下に行い、15名の会員が参加しました。

山上会員宅の隣りであり、門徒総代をも務めている関係で実にいろいろと気を配って頂くことができました。山上御夫婦に対し深く感謝致します。

夕食は早く、消灯9時とのことでしたが……部屋で円陣になり遅くまで雑談に花が咲きました。お蔭で“般若湯”という言葉が覚えました。

夜と早朝の2回、各々40分座禅をしましたが一般の人の入れない座禅堂であり、境内の案内も詳しく拝聴することができました。早朝の座禅は4時からで「警策」で打たれると案外ずしっと痛いものだ<sup>きょうさく</sup>と認識したり、心に種々雑念の漂う内に終了、朝食後本堂を掃き、雑布掛けをしました。昔、小学校の廊下、教室を掃除したことが思い起こされます。

「脚下照顧」の山門を後にし、山上会員宅へ訪問し、折角の機会とのことで猿山灯台へ観光に行きました。

強い風の日で怒濤は能登に相応わしい景色でありました。

座禅は「静」ではありますが、怒濤の「動」へ共通する面が多分にあると思われまふ。何故なら禅により強く生きる為の精神を養うのだから。

(桜井 記)

清閑な雰囲気の中での座禅は、まさに身の引きしめる感であった(?)。19日、午前4時の起床はさすがにこたえたが、朝のおつとめは、それは大変丁寧なものだった。朝食をすませたあとの御堂のお掃除では、日常ぞうきんなど手にしたこともないロータリアンが一致団結し、みがきあげた廊下のかがやきは、また格別のものであった。

(萩原 記)



